

Implementation and Evaluation on Seminar of Teaching Profession

岸田恵津, 別惣淳二, 南埜猛, 山中一英, 石野秀明

KISHIDA Etsu, BESSO Junji, MINAMINO Takeshi, YAMANAKA Kazuhide, ISHINO Hideaki

本研究は、教職課程の質的水準の向上のために新設・必修化され、他大学より先行実施している「教職実践演習」に関して、学生にどのような学びや教育効果があったのか、また授業担当教員（以後「担当教員」）は、授業を通して成果と課題をどのように認識したのかを質問紙調査等を通じて明らかにするものである。本学では「事例研究」「模擬授業」「まとめ（履修カルテに基づくグループ討論）」から授業内容を構成した。23年度の実施結果をもとに24年度の授業に改善を加えた。その結果、「事例研究」では、90%以上の学生がグループでの話し合いの結果に満足し、他のメンバーの意見を聞いて自分の考えが深まったと回答した。「事例研究によって4年間の学びを総合することができた」については23年度に比べ学生の評価は向上したが、相対的にみて高い評価ではなかった。担当教員も授業の振り返りの話し合いの中で、課題として捉えており、「学びの総合」という概念について様々な認識が示された。「模擬授業」では、90%の学生が授業を通して教科の知識や理解が深まったと回答し、新たな学びや気づきを得ていた。担当教員は「学生の指導力・授業実践力を補完することができた」と考えていた。「まとめ」では、4年間で身に付けた資質能力と自己課題を明確にすることができたことと肯定的な回答をした学生は80%を占めた。また担当教員からも高評価を得ることができた。一方、教職実践演習という科目全体を通して学生の「教員として必要な資質能力の統合・形成の自覚」をどのように促していくかについて今後検討していく必要がある。したがって、課題も残されたが、本科目の24年度の評価は前年度よりも全体的に向上し改善された。このように本学では、計画、実施、評価、改善のサイクルを繰り返しながら、教員としての実践的資質能力の有機的統合と形成の実現に先導的に取り組んでおり、他大学の実施に向けての示唆を与える結果を得た。

キーワード：教職実践演習、事例研究、模擬授業、評価、カリキュラム

Key words: seminar of teaching profession, case study, teaching simulation, evaluation, curriculum

1. 研究の背景と目的

平成20年11月に教育職員免許法施行規則が改正され、平成22年度の入学生のカリキュラムから教職実践演習の導入が決定された。教職実践演習は、教職課程における授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて得た知識や技能が、教員として必要な実践的資質能力として有機的に統合され、最終的に形成されているかを確認するものであり、「学びの軌跡の集大成」として位置付けられる。実施に先立ち、文部科学省より留意点等が示され、教職実践演習では、教員として求められる4つの事項（①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項）を含めることが適当であること、また、授業内容例として、役割演技、事例研究、模擬授業等があげられている。しかし、この科目の内容や方法等は明らかではなく、実施にあたって各大学は模索状態である。

本学では、平成20年度入学生より教職実践演習を新設・必修化し、他大学より先行実施することとなった。そのため、教職実践演習専門部会において授業の内容・方法等について協議と検討を重ね、「事例研究」と「模擬授業」、「まとめ（学びの総括）」（履修カルテに基づくグループ討論）から授業を構成することとした。

本研究では、平成23年度と24年度に実施した教職実践演習の「事例研究」「模擬授業」「まとめ」に関して、学生にどのような学びや教育効果があったのか、また授業担当教員（以後、「担当教員」と表記する）は、この授業を通して成果と課題をどのように認識したのかを質問紙調査等から明らかにすることを目的とする。また、得られた結果を踏まえて、授業実践モデルを提示し、本学のカリキュラム改善の一助とすることもねらいとする。

平成23年度に実施した結果、「事例研究」では、95%の学生が「学んだ内容は教員になったときに役立つもの」と捉えていた。一方、「事例研究によって4年間の学びを総合することができた」については、それほど高い評価ではなく、担当教員も同様に認識していた。「模擬授業」では、85%の学生が授業を通して教科の知識や理解が深まったと回答し、新たな学びや気づきを得る一方、担当教員からは最終成果とするには課題が残ることが指摘さ

れた。「まとめ」では、4年間で身に付けた資質能力と自己課題を明確にすることができたと強く肯定的な回答をした学生は7割を占めた。しかし、担当教員からは、教職実践演習という授業としての一貫性に欠けること、学生に対して教職実践演習の位置付けについての説明が不十分であることや、「まとめ」について全コース共通の授業内容を設定することなどが課題としてあげられた。これらの成果と課題を踏まえて24年度の授業改善に取り組んだので、その結果を中心に報告し、2年間の取組のまとめとする。

2. 兵庫教育大学で実施した教職実践演習の内容

4年次後期の「教職実践演習」を履修する前に、第3年次と第4年次の2度にわたり「教員として求められる事項」を記した履修カルテに自己評価（記述と到達度評価）をさせた。その上で、表2-1に示すように、「教職実践演習」の6回分を「事例研究」にあて、学校や学級に遍在する出来事や学生自身が実習等で経験した事例についてグループで問題点や対応策を討論させた。また6回分を「模擬授業」にあて、学生の所属コースとは異なる教科の学習指導案（幼年教育コースの学生は保育指導案）を作成した上で模擬授業を行い、クラスで意見交換・討論をさせた。なお、「事例研究」と「模擬授業」ではコース（分野）を基本単位として、20人前後のクラスを作って実施した。さらに2回分を「まとめ」にあて、履修カルテの記述内容と教職実践演習で得た成果をもとに4年間で学生が身につけた資質能力についてグループ討論等により振り返りをさせ、まとめさせた。

表2-1 本学の教職実践演習で確認する5領域の事項と授業構成

①学び続ける教師 ②教師としての基本的素養 ③子ども理解に基づく学級経営・生徒指導
④教科等の指導（保育の展開と指導） ⑤連携・協働

（※確認する5領域は、本学の教員養成スタンダードに示された資質能力を適用している）

	授業構成	授業内容	確認する領域の事項
第1回	オリエンテーション	授業の趣旨、ねらい、進め方について説明を行う。	
第2回～第7回	事例研究	学校や学級に遍在する出来事や学生自身が実習等で経験した事例についてグループで問題点や対応策を討論する。	①②③⑤
第8回～第13回	模擬授業	学習指導案を作成して模擬授業を行い、意見交換・討論を行う。	①②④
第14回～第15回	まとめ [学びの総括]	履修カルテの記述内容と事例研究、模擬授業で得た成果をもとに、4年間で学生が身につけた資質能力と教職に従事するにあたっての自己課題についてグループ討論等により振り返り、明らかにする。	①②③④⑤

3. 「事例研究」に関する効果の検証

3-1. 学生を対象とした質問紙調査

昨年度同様、授業終了時に、各担当教員が、調査の目的ならびに結果の取り扱い等について説明を行ったうえで「事例研究」の効果を検証するための質問紙調査を実施した（添付資料参照）。この質問紙は、「事例研究」の評価の対象となる領域（教員、話し合い、事例、成果、成績評価）に関する評定項目（「とてもあてはまる（4）～あてはまらない（1）の4段階、16項目」と、「他に取って欲しいテーマ」ならびに「改善すべき点」について自由に記述を求める項目から構成された。なお、「事例」と「成績評価」にかかわる項目は、昨年度の研究課題を受けて今年度新たに加えたものである。

ここでは、集計した結果の概要を報告するとともに、それに基づく考察を展開する。

(1) 評定項目に関する分析

(a) 概要

表3-1～5に、領域ごとに、それぞれの項目についての単純集計の結果を示した。

表3-1 「教員」にかかわる項目に対する受講生の評価

	とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
教員から提示された事例の内容についてよく理解できた。	48.55%	47.83%	3.62%	0.00%
教員からの問いかけやアドバイスによって、グループでの話し合いが活発になった。	35.97%	46.04%	16.55%	1.44%
教員からの講話によって、事例に含まれる実践的課題と	53.24%	35.97%	10.07%	0.72%

対応策について、新たな学びがあった。				
--------------------	--	--	--	--

表 3-2 「話し合い」にかかわる項目に対する受講生の評価

	とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
グループでの話し合いに積極的に参加することができた。	64.75%	30.22%	5.04%	0.00%
納得のいく話し合いができた。	40.58%	50.72%	7.25%	1.45%
グループでの話し合いの過程に満足している。	42.45%	43.17%	13.67%	0.72%
グループでの話し合いの結果に満足している。	34.31%	56.20%	8.76%	0.73%
グループの他のメンバーの意見を聞いて、自分の考えが深まった。	69.78%	24.46%	5.04%	0.72%
グループでの話し合いによって、自らの課題を明確にすることができた。	34.53%	51.80%	12.23%	1.44%

表 3-3 「事例」にかかわる項目に対する受講生の評価

	とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
教員から提示された事例の内容を具体的にイメージすることができた。	38.41%	52.90%	8.70%	0.00%
教員から提示された事例の数は適切であった。	42.45%	45.32%	9.35%	2.88%
教員から提示された事例は、4年間の授業や実習の中で疑問や課題を感じたことのある内容であった。	25.36%	44.93%	24.64%	5.07%

表 3-4 「成果」にかかわる項目に対する受講生の評価

	とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
事例研究で学んだ内容は、今後、教員になったときに役立つものと思った。	70.50%	24.46%	3.60%	1.44%
事例研究で学んだ内容は、これまで4年間の授業や実習の中であまり扱われてこなかったものであった。	21.74%	34.06%	36.23%	7.97%
事例研究によって、4年間の学びを総合することができた。	21.58%	50.36%	25.18%	2.88%

表 3-5 「成績評価」にかかわる項目に対する受講生の評価

	とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
成績評価の基準・手続きが示された。	16.55%	35.25%	33.09%	15.11%

○「教員」ならびに「話し合い」について

項目によって多少の違いはあるものの、学生の評価は概ね良好であった。なかでも、とりわけ評価が高かったのは、「教員からの講話によって、事例に含まれる実践的課題と対応策について新たな学びがあった[教員]」、「グループでの話し合いに積極的に参加することができた[話し合い]」、「グループの他のメンバーの意見を聞いて、自分の考えが深まった[話し合い]」であった。これらは、昨年度の結果を追認するものであった。教員による新たな学びが評価されていることから、担当教員に求められる専門性の内容を問う必要がある。また、学生の考えとして何がどのように深まったのか、さらに具体的に検討していくことが求められる。

○「事例」について

昨年度の調査において、授業の目的・内容・方法にかかわる改善点として、最も指摘が多かったのが扱う事例の質と量の改善であった。そこで、今年度の授業では、事例の質として具体性を高めるとともに、担当教員が事例を紹介したり学生に事例を提示させたりするなど量に配慮した指導を行った。本調査では、新たに上記の3つ

の評価項目を設定した。結果として、事例の具体性と扱う事例の数については、概ね高い評価を得た。一方で「教員から提示された事例は、4年間の授業や実習の中で疑問や課題を感じたことのある内容であった」については、「あてはまる」という回答を挟んで評価が分かれている観があり、今後その要因を検討していく必要があるだろう。

○「成果」について

「事例研究で学んだ内容は、今後、教員になったときに役立つものだった」という項目への評価はきわめて高いと判断された。次に「事例研究で学んだ内容は、これまで4年間の授業や実習の中であまり扱われてこなかったものであった」については、「あてはまる」という回答を挟んで評価が分かっていた。これには2つの理由が考えられる。第一に、本学のカリキュラムにおいて、事例研究という方法を採用する授業の数や、事例の中で扱われる内容を学ぶ機会が、学生の所属するコース等により異なることである。これは、後述するように、担当教員の振り返りの中でも聴かれた意見である。第二に、本授業が〈授業や実習で学んできたことの確認〉を主たる目的としながらも、たとえば教員養成スタンダードで想定しているような目指す教師像に向けて、〈授業や実習であまり扱われなかったことの補完〉という機能を有しており、それが学生の評価に少なからず反映したのではないだろうか。最後に「事例研究によって、4年間の学びを総合することができた」という項目については、昨年度同様、それほど高い評価ではなかった。この項目は、「教職実践演習」の目的の達成を見極めるうえで重要である。しかし一方で、担当教員自身が「学生が4年間の学びを総合できた状態」というものを十分に共通理解できていないのではないだろうか。この点については、担当教員の振り返りについての考察の中で詳しく論じることとする。

○「成績評価」について

全学の授業評価項目に合わせるかたちで、項目「成績評価の基準・手続きが示された」を新たに設定したが、あまり高い評価ではなかった。事例研究の成績評価の観点は、シラバスに「1. 事例における問題点を考えることができる」、「2. 原因を追究することができる」、「3. 対応策を考えることができる」の3点を示してはいる。しかし、「基準・手続き」という概念で想起されるような具体性は十分でない。今後、さらに検討していく必要があるだろう。

(b) 平成23年度と平成24年度の評価の比較

平成23年度と平成24年度に共通に実施した項目の評価について、平均値と標準偏差を算出した。さらに、それぞれの年度の平均値を従属変数として、対応のないt検定により年度間の比較を行った。その結果、学生からの評価が有意に低下した項目はなく、6つの項目で有意な向上が認められた。この授業に対する、学生と担当教員の意識が高まってきたことを示唆するものである。表3-6～8に、領域ごとにそれぞれの項目について結果を示す。

表3-6 「教員」にかかわる項目についての年度間比較

	平成23年度	平成24年度	t値	有意水準
教員から提示された事例の内容についてよく理解できた。	3.25(0.65) N=146	3.45(0.57) N=138	2.75	p<.01
教員からの問いかけやアドバイスによって、グループでの話し合いが活発になった。	3.20(0.78) N=146	3.17(0.75) N=139	-0.37	n.s.
教員からの講話によって、事例に含まれる実践的課題と対応策について、新たな学びがあった。	3.46(0.67) N=146	3.42(0.70) N=139	-0.51	n.s.

注)各年度のセルについて、上数値が平均評定値、括弧内が標準偏差を示している。以下、表3-7、3-8も同じ。

表3-7 「話し合い」にかかわる項目についての年度間比較

	平成23年度	平成24年度	t値	有意水準
グループでの話し合いに積極的に参加することができた。	3.45(0.66) N=146	3.60(0.59) N=139	2.05	p<.05
納得のいく話し合いができた。	3.09(0.70) N=146	3.30(0.67) N=138	2.64	p<.01
グループでの話し合いの過程に満足している。	3.26(0.66) N=146	3.27(0.72) N=139	0.16	n.s.
グループでの話し合いの結果に満足している。	3.05(0.65) N=146	3.24(0.64) N=137	2.53	p<.05
グループの他のメンバーの意見を聞いて、自分の考え	3.59(0.60)	3.63(0.62)	0.65	n.s.

が深まった。	N=145	N=139		
グループでの話し合いによって、自らの課題を明確にすることができた。	3.02(0.71) N=146	3.19(0.70) N=139	2.08	p<.05

表 3-8 「成果」にかかわる項目についての年度間比較

	平成 23 年度	平成 24 年度	t 値	有意水準
事例研究で学んだ内容は、今後、教員になったときに役立つものだった。	3.53(0.63) N=146	3.64(0.63) N=139	1.42	n.s.
事例研究で学んだ内容は、これまで4年間の授業や実習の中であまり扱われてこなかったものであった。	2.64(0.88) N=146	2.70(0.90) N=138	0.56	n.s.
事例研究によって、4年間の学びを総合することができた。	2.68(0.83) N=146	2.91(0.76) N=139	2.42	p<.05

○「教員」ならびに「話し合い」について

「教員から提示された事例の内容についてよく理解できた[教員]」について、有意な向上が認められた。これは、上述のように、今年度事例の質と量の改善を図ったことが一因であると考えられる。さらに、「話し合い」の領域では、「グループでの話し合いに積極的に参加することができた」「納得のいく話し合いができた」「グループでの話し合いの結果に満足している」「グループでの話し合いによって、自らの課題を明確にすることができた」の4項目で有意な向上が認められた。学生が、話し合いに積極的に参加することで納得し、自らの課題を明確にできたという結果に満足していることが窺える。担当教員の関わりに対する評価も高い水準にあるが、担当教員の振り返りにおいて、それぞれがグループ分けや進行方法など様々な工夫を凝らしていることが分かった。学生と担当教員の関与の総体が向上し、話し合いの質を高めているものと推察される。

○「成果」について

「事例研究によって、4年間の学びを総合することができた」について、有意な向上が認められた。上述のように、この項目に対する評価は必ずしも高くなく、「学びの総合」とは何かについて、さらに検討を重ねなくてはならない。それでもなお、一定の向上が認められたのは、オリエンテーションや授業内容の周知によって、「学びの総合」に対する担当教員と学生の双方の意識が高まり、直感的な水準での把握が進みつつあることを示しているのではないだろうか。

3-2. 担当教員によるグループ・ディスカッション

「事例研究」の担当教員が、グループ・ディスカッションを通して、自らの授業のありようを率直に振り返るとともに、今後の授業内容・方法の改善に向けた論点を抽出し、それらについて意見交換する機会を設けた（実施日：平成 25 年 3 月 18 日）。そこでは、担当教員によって、それぞれの授業実践上の工夫点が開示されたり、新たなアイデアが創出されたりもしたが、紙幅の都合上、ここでは、グループ・ディスカッションを通して現れた主要な論点について言及することにしたい。

○（本授業科目のねらいである）「学びが総合した状態」を定義する必要性

質問紙の中に、「事例研究によって、4年間の学びを総合することができた」という評定項目が設けられている。これは、本授業科目の趣旨・ねらいに「本科目は、大学4年間の各授業科目の履修やそれ以外での様々な活動等を通して学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、大学が養成すべき教師像や到達目標等に照らして最終的に確認することを目的とする」と定められていることに基づいている。グループ・ディスカッションを通して現れた第一の論点は、この授業科目の趣旨・ねらいと密接にかかわるものである。それは、そもそも「4年間の学びが総合された状態」とはどのような状態なのかというものである。科目の趣旨・ねらいに即して表現するならば、「4年間の活動等を通して学生が身に付けた能力が有機的に統合」された状態とはどのような状態なのかという問いである。現状では、この問いをめぐって多様な回答が可能であり、担当教員はそれぞれの回答を必ずしも共有しているわけではない。グループ・ディスカッションでは、たとえば、事例の原因や対応策を検討する過程でこれまでに「学んできたこと自体が、ここで生かされている」かどうかという（おそらくは知的な）側面をもとに定義するという意見もあれば、「この授業を受けることによって、ある意味、教員になって旅立つうえでの自信につながったというか、そういう手応えが

あったか」という（おそらくは心理的な）側面をもって定義するという意見もあった。「学びの総合」という言葉にどのような意味が与えられるかが、この授業における担当教員のかかわりの具体を規定することとなり、今後、この問いをめぐって、この授業に携わる教員全体で議論を積み重ねていく必要があるだろう。

○ 「教職実践演習」の取組からみた本学のカリキュラムに関する課題

「3-1. 学生を対象とした質問紙調査」において既述したように、本授業科目は、〈授業や実習で学んできたことの確認〉を主たる目的としながら、教員養成スタンダードが想定する教師像に向けて〈授業や実習であまり扱われなかったことの補完〉という機能を併せもつ。グループ・ディスカッションでは、とりわけ後者の機能にかかわって活発な議論が展開された。その要点を記そう。

まず、〈授業や実習であまり扱われなかったことの補完〉という点が強く意識されたとき、本学のカリキュラム全体にかかわって次のような論点が抽出された。現行のカリキュラムでは、事例研究という方法を採用する授業の数や事例の中で扱われている内容を学ぶ機会が、学生の所属するコース等により異なっている。たとえば、学校教育専修の学生に比べて、教科・領域教育専修の学生は、生徒指導や学級経営上の教育課題について議論する機会が少ない。したがって、教科・領域教育専修の学生の中には、「教職実践演習」実施時点まで、そのような事例について議論した経験をほとんどもたないというものも少なくない。学校教育の基盤が学習指導と（広義の）生徒指導であることを考えあわせるなら、この状態はあまり望ましいことではないのかもしれない。この点は、カリキュラム・マップ策定作業の過程で指摘されてきたことであるが、グループ・ディスカッションにおいても、あらためて吟味すべき課題として認識されることとなった。

つぎに、〈補完〉する機会をいかに担保するかという問題が提起された。授業を通して学生個々に不足する知識や技能についての自覚がもたらされた場合、それらを補い定着を図る機会が必要になる。ところが、開講時期が4年次後期であるゆえ、実質的に、そのような機会を設けることはきわめて難しい。本授業科目のねらいを忠実に実現しようとするれば、その機会がきちんと担保されなければならないが、これをどうするかという問題である。

また、以上のような問題点の改善に向けた示唆的な議論も展開されたので、紹介しておきたい。本学では、年次ごとに、学生が教員養成スタンダードを基礎にリフレクションする機会（「リフレクション・ウィーク」）が設けられている。グループ・ディスカッションによって現れたのは、この機会を柔軟に活用できないかという提案である。すなわち、その機会に各クラスで事例討議を実施することも可能なのではないかというものであり、そうすることで、（ここまで論じてきたような）現行カリキュラムの問題点を改善する一助になるかもしれないという提案である。もちろん、その場合も、（専門性が求められる）担当教員の割り当て等、解決すべき課題は多くあるだろうが、議論のきっかけには十分になるように思われる。

担当 石野秀明・山中一英

4. 「模擬授業」に関する効果の検証

「模擬授業」では、本学の教員養成スタンダードのうち、特に「④教科等の指導（保育の展開と指導）」の領域についての確認を行う。授業内容については、学生に学習指導案を作成させ、その学習指導案に基づいた模擬授業を行なわせ、学習指導案と模擬授業をもとに評価を行った。

「模擬授業」の試みとして、学生が模擬授業を行う教科を学生が所属するコース（分野）の教科ではなく、その他の教科の模擬授業を行うようにクラス編成を行った。近年では小学校でも教科担任制が導入されているが、基本はあくまでもクラス担任制であり、また小規模校では教科担任制の導入は人員配置の上で難しくすべての教科を一人の教員が担当せざるを得ない。そのようなことから、小学校教員はすべての教科の授業を行えるということが最低の資質要件である。兵庫教育大学の教科領域教育専修の学生や学校教育専修で中学・高校免許を取得する学生の場合、専修専門科目群の指導法などの授業科目でそれぞれの教科の学習指導案の作成ならびに模擬授業の経験を多く積んでいるのに対して、それ以外の教科の学習指導案の作成や模擬授業の経験は少ないと考えられる。そこで、24年度も上記のクラス編成を行うことで、教職実践演習のねらいのひとつである「不足している知識や技能等を補い、その定着を図ること」に対応しようとした。

4-1. 学生を対象とした質問紙調査

授業終了時に156人を対象に質問紙調査を実施し、135人から回答を得た。6項目の質問に対して4件法で回答してもらった結果が表4-1である。全体的に概ね肯定的な回答であった。23年度と24年度に共通して設定した

「模擬授業（学習指導案の作成を含む）を通して、その教科の知識や理解が深まった」に対しては、89.6%が「とてもあてはまる/あてはまる」と回答しており、良好な結果であった。この結果を23年度と比較すると、23年度の平均評定値が3.13であったのに対して24年度は3.38と向上し、年度間に有意差が認められた。「模擬授業」を通して、教科に関する知識や理解が深まり、教科指導や授業づくりに関する自らの課題を明確にすることができるなど、「模擬授業」の目的に応じた結果が得られた。

「模擬授業で学んだ内容は、これまで4年間の授業や実習の中であまり扱われてこなかったものであった」は他の項目と比べて評価が分かれた。「とてもあてはまる/あてはまる」、すなわち、実習などで扱われてこなかったと回答した学生が、教職実践演習で実施した模擬授業の教科は、主に音楽、家庭科、図画工作、英語であり、「あてはまらない/少しあてはまる」、すなわち扱われてきたのは国語、社会などであった。扱いの有無別に成果に関する項目の評点を比較すると、知識・理解の深まりに関する評点に有意差があり、実習等をあまり行ってこなかった教科で「模擬授業」を行った学生の方が、知識・理解が深まることが示唆された。これは、授業内で不足している知識・技能等の補完が行われたことによると考えられる。

表 4-1 「模擬授業」に対する学生の評価

	とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない	平均 SD
教員の説明や助言はわかりやすかった。〔教員〕	71 52.6	52 38.5	10 7.4	2 1.5	3.42 0.70
模擬授業に積極的に取り組むことができた。〔模擬授業〕	70 51.9	55 40.7	9 6.7	1 0.7	3.44 0.65
模擬授業で学んだ内容は、これまで4年間の授業や実習の中であまり扱われてこなかったものであった。〔模擬授業〕	34 25.2	46 34.1	36 26.7	19 14.1	2.70 1.00
模擬授業を通して、その教科に関する知識や理解が深まった。〔成果〕	65 48.1	56 41.5	14 10.4	0	3.38 0.67
模擬授業を通して、教科指導や授業づくりに関する自らの課題を明確にすることができた。〔成果〕	57 42.5	64 47.8	12 9.0	1 0.7	3.32 0.67
模擬授業で学んだ内容は、今後、教員になったときに役立つものと思った。〔成果〕	90 67.2	37 27.6	7 5.2	0	3.62 0.59

N=135, 上段は人数を下段は人数%を示す。「とてもあてはまる(4点)」～「あてはまらない(1点)」の4段階で評価した平均評定値と標準偏差(SD)を最右列に示す。〔 〕内に評価の対象となる領域を示した。

表 4-2 4年間の授業や実習での扱われ方別にみた成果に関する項目の評点

	扱いなし(N=80)	扱いあり(N=55)	P値
模擬授業を通して、その教科に関する知識や理解が深まった。	3.50 0.66	3.20 0.65	0.01
模擬授業を通して、教科指導や授業づくりに関する自らの課題を明確にすることができた。	3.33 0.65	3.31 0.70	0.93
模擬授業で学んだ内容は、今後、教員になったときに役立つものと思った。	3.68 0.54	3.53 0.63	0.14

「模擬授業で学んだ内容は、これまで4年間の授業や実習の中であまり扱われてこなかったものであった」の回答について、「とてもあてはまる/あてはまる」を「扱いなし」、「少しあてはまる/あてはまらない」を「扱いあり」とした。数値は上段に平均評定値を下段に標準偏差を示した。T検定の結果をP値で表した。

模擬授業を行うことによってどのような学びや気づきがあったのかを記述回答で求めた。その記述内容を、授業等での既知の学びをベースにしてその内容の確認や再評価をしている記述内容を「気づき」、既知ではなくこの授業で初めて学んだとするような記述内容を「新たな学び」として分類した。さらに、それらの内容をもとに表4-3のように分類し、結果をまとめた。

「気づき」と「新たな学び」の記述件数はほぼ同程度であり、4年間の習得内容をもとに活用した「気づき」が23年度よりも増加した。「気づき」と「新たな学び」の内容をみると、「学習指導」（教師の授業内での活動や学習の進め方についての言及）に関する内容が比較的多く記述されていた。次いで、自己課題に関する気づきも多くあげられていたが、課題解決のためにどのように取り組もうと認識したのかは不明である。

表 4-3 模擬授業を通じた「気づき」と「新たな学び」

項目	小項目	N	%	記述内容、記述例
気づき		116	85.9	
	教育内容・目標	26	19.3	・事象の中から焦点を絞って学習を深めることが大切 ・内容が生活に直結しているため、身近な生活の中に疑問や問題があること
	学習指導	47	34.8	・子どもへの声かけや問いかけの配慮 ・板書の工夫 ・資料や写真の効果的な使い方
	自己課題	32	23.7	・専門教科に比べて知識が足りないことに気づいた。 ・発問の仕方がわかりにくいと改めて気づいた。
	教材研究の大切さ	11	8.1	・何を教えたいかを明確にし、そのための教材研究が大切
	全般的な指摘	16	11.9	・広い場で子どもをまとめる難しさ ・前後の関連性、既習事項を理解していなければいけない。
新たな学び		102	75.9	
	教育内容・目標	39	28.9	・国語の説明文では、内容と文章表現に着目することがポイント ・社会的事実から、どんな思いや考えがあったのか、原因などを考えさせることで深まる
	学習指導	59	43.7	・活動あって学びなしという状態にならないようにすること、作ったものを見せることが子どもたちにわかりやすいものとなる。 ・道具の使い方、片付けの指導、準備物の意味を考えて選ぶ。 ・ICTの活用などの指導技術
	評価	3	2.2	発表内容に対してどう評価するかなどのヒントを得た。
	全般的な指摘	4	3.0	・社会科の授業の魅力や楽しさ
感想		15	11.1	・初めての教科なのでためになった。 ・他の人の授業や講評が参考になった。

N=135, 複数回答の場合はそれぞれ独立した回答として処理した。

「模擬授業」の内容や実施方法についての課題や改善点を記述回答で求め、それを整理した結果が表 4-4 である。最も回答が多かったのは授業内容、中でも進め方に関する課題であった。作成した学習指導案の配付の仕方や指導案検討の時間配分などに対する指摘であり、23年度と同程度の割合であった。一方、23年度に多くあげられていた土曜開講など日程に関する指摘と他教科の実施を希望するものは減少しており、この結果は、オリエンテーションで「教職実践演習」の趣旨や方法の説明を充実させて周知したことによると考えられる。

表 4-4 「模擬授業」の内容や方法についての課題や改善点

項目	小項目	N	%	23年度%
日程	土曜開講	11	8.1	29.5
	卒論の時期をはずすこと	7	5.2	
	教採・実地教育前の実施	1	0.7	11.5
他教科・全教科希望		9	6.7	10.8
中高免希望者への対応		3	2.2	2.9
授業内容	進め方	15	11.1	12.9
	課題の提示	3	2.2	
	授業の意義	1	0.7	
カリキュラム		2	1.5	
クラス編成		1	0.7	
教員の説明・指導		7	5.2	2.9
教材教具の整備		1	0.7	
時間不足	授業の準備、授業時間	2	1.5	5.0
オリエンテーションのもち方		1	0.7	
その他		6	4.4	

N=135, 記入者数 84 (62.2%), 複数回答の場合はそれぞれ独立した回答として処理した。

4-2. 担当教員を対象とした質問紙調査

授業を実施してよかった点・有意義な点、また改善点や課題について、前年度の記述回答をもとに質問を設定して4件法で回答を求めた。その結果を示したのが表4-5と4-6である。担当教員は、授業を実施して有意義であったこととして、「学生にとってよい学びの機会になった」「学生の習熟度や授業実践力を知る機会になった」ととらえていた。また、多くの担当教員が「学生の指導力・授業実践力を補完することができた」をよかったこととしてあげているのは不足している知識・技能等の補完と定着もねらいとした授業とすることに取り組んだ結果と考えられる。自分の所属コース（分野）と異なる学生を対象にして授業を行ったことに対しては、一部否定的にとらえている担当教員も見られたが、多くは肯定的にとらえていた。

課題としては、担当教員の負担や教科書、教具等の整備に関するものが比較的多くあげられていた。「仕上げる授業になりにくい・なっていない」といった指摘もあり、学びの集大成というよりも、学生の指導力・授業実践力を補完することに力点が置かれた教職実践演習になっていることが示唆された。評価方法や授業の方法・進め方に関する課題を感じている担当教員は少なく、授業はほぼ円滑に実施されたといえる。

表 4-5 授業を実施してよかった点、有意義な点

	とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
学生にとってよい学びの機会になった。	8 (47.1)	9 (52.9)	0	0
学生の習熟度や授業実践力を知る機会になった。	9 (52.9)	8 (47.1)	0	0
学生の指導力・授業実践力を補完することができた。	5 (29.4)	10 (58.8)	2 (11.8)	0
教員自身の教育大学でのあり方などを振り返る機会になった。	7 (41.2)	4 (23.5)	4 (23.5)	2 (11.8)
カリキュラムや授業の改善に役立つ。	4 (23.5)	9 (52.9)	2 (11.8)	2 (11.8)
自分の所属コース（分野）と異なる学生を対象にして授業を行ったことがよかった。	5 (29.4)	8 (47.1)	3 (17.6)	1 (5.9)

N=17, 数値は人数と（人数%）

表 4-6 授業の課題、改善点

	とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
仕上げる授業になりにくい・なっていない。	0	5 (29.4)	6 (35.3)	6 (35.3)
評価方法がわからない。	0	2 (11.8)	4 (23.5)	11 (64.7)
教員の負担が大きい。	3 (17.6)	6 (35.3)	4 (23.5)	4 (23.5)
教科書や指導書、教具等が整備されていない。	3 (17.6)	3 (17.6)	4 (23.5)	7 (41.2)
授業の方法・進め方がむずかしい。	0	1 (5.9)	7 (41.2)	9 (52.9)

N=17, 数値は人数と（人数%）

4-3. 成果と課題

「模擬授業」では、前年度の結果を踏まえ、「学びの集大成」だけでなく、不足している知識・技能等の補完と定着もねらいとした授業に改善することに取り組んだ。具体的には、オリエンテーションで、教職実践演習において「模擬授業」を実施する意義やねらい、課題への取り組み方などを十分説明しオリエンテーションの充実を図った。また、担当教員は知識・技能等を補完することも意識して授業を構成し、実施した。

その結果、前年度よりも24年度に実施した「模擬授業」の方が学生からの評価が良好であった。また、担当教員からの評価も肯定的であり、良好であった。したがって、前年度の「模擬授業」に改善を加えたことによって、24年度の「模擬授業」では、約90%の学生が授業を通して教科に関する知識や理解が深まり、気づきを得るといった高評価を得ることができた。

しかし、課題としては、学生には教科等の指導に関する新たな学びや自己課題に対する気づきが多く、教員として必要な資質・能力が統合されているという認識が弱いことである。自己課題の解決のためにどのように支援していくかを検討することが必要である。

兵庫教育大学では平成20年度から新しいカリキュラムを実施し、そのカリキュラムで学んだ学生が教職実践演習を受講している。カリキュラムでは、初等教科内容科目Ⅰ（例えば初等国語Ⅰ）並びに初等教科指導法のすべ

ての教科の教育法（例えば初等国語教育法）の科目を必修にし、教科に偏りなく幅広く学習する配慮もなされている。しかし、オリエンテーション時に、授業や実地教育での学習指導案の作成及び（模擬）授業の経験を別途調査すると、実施したと回答された教科には偏りがあった。したがって、本稿で記述した調査結果や、結果的に不足している知識・技能等の補完と定着もねらいとした授業内容になってしまうという状況は、カリキュラムのねらいが十分に活かされていないことによるとも捉えられ、教職実践演習だけでなくカリキュラム全体とも関わらせて今後検討していくことが必要である。

担当 岸田恵津, 南埜猛

5. 「まとめ」に関する効果の検証

「まとめ」では、「4年間に履修した授業科目や授業外の様々な活動を通じて身に付いた資質能力、教職に従事するにあたっての自己の課題を、グループ討論等によって明確にする」ことを目的としている。「まとめ」では学生の学びの総括という意味があるため、本学で養成すべき教師像として示した「教員養成スタンダード」を用いて、①学び続ける教師、②教師としての基本的素養、③子ども理解に基づく学級経営・生徒指導、④教科等の指導、⑤連携・協働の各内容が学生に身につけているかどうかの確認を行うこととした。

実施方法としては、平成23年度の反省を踏まえて、①「まとめ」が始まるまでに学生に「履修カルテ」を記入させ、「まとめ」で使用すること。②「まとめ」で取り扱う各コース共通の内容を「大学4年間で身につけた資質能力や、教職に就くにあたっての自己課題をグループ討論等によって明確にする」こと、③「履修カルテ」の中の「自己課題」と「身につけた資質能力」を学生に記入させることとした。なお、グループ討論については、コース（分野）ごとに編成されるクラスの人数等を考慮し、担当教員が学生と個別に面談する方法や学生同士がペアになって対話する方法など柔軟に選択することができるようにした。

上記のように、「まとめ」の内容・方法を変更することによって、13コース（分野）でどのような授業内容が採用されたのか、またそれを実施することでどのような効果と課題があったのかを把握する必要があった。そのため、担当教員と学生に対して質問紙調査を実施したので、その結果を報告する。

5-1. 担当教員を対象とした質問紙調査

授業終了後に「まとめ」の担当教員に対して質問紙調査を実施し、18名の教員から回答を得た。まず初めに、13コース（分野）でどのような授業内容がされたのかを記述回答で求め、その結果をまとめたものが表5-1である。表5-1に示すとおり、「教職に向けた学びの記録」を活用して大学4年間の学びの成果と課題を振り返り、発表し、議論した」という授業内容を13コース中11コース(84.6%)が採用していた。その他の2コースについては、「教職に向けた学びの記録」を使用せずに4年間の学びを振り返り、発表したり、議論したりとしたという内容であった。このように、2コースは異なった授業内容であったが、それ以外のコースは「教職に向けた学びの記録」を活用して4年間の学びと課題について議論していた。

表5-1 各コースの「まとめ」の授業内容

「まとめ」の授業内容	N	%
「教職に向けた学びの記録」に基づいて大学4年間の学びの成果と課題を振り返り、発表し、議論した。	11	84.6
教職実践演習の事例研究と模擬授業で学んだことを振り返り、討議した。	3	23.1
専門教科（美術科）についての特徴や課題、あるいは算数の教材研究を通して教材研究の必要性とその方法について振り返り、確認した。	2	15.4
自分がこれまで大切にしてきたこと、教師になってから子どもに伝えたいことをグループに分かれて発表し合った。	1	7.7
「初年次セミナー」でのまとめと今の自分の在り方を比べさせた。	1	7.7
「理想の教師像」「理想的でない教師像」「国語の教師としての理想像」を記述させ、話し合った。	1	7.7
希望校種の学級担任として「学級目標」を立たせ、その背後にある自分の考えを議論し、これまでの学びを整理した。	1	7.7

小学校の教員生活を振り返って、20代から40代までの教職キャリア形成について講義した。	1	7.7
学生が抱く課題や教職に就くにあたっての不安について、現職教員から助言をもらった。	1	7.7
「10年後になりたい教師像」について全体討論をした。	1	7.7

(注) 上記の回答は13コースによる回答であり、複数回答の場合はそれぞれ独立した回答として処理した。

「まとめ」の目的の達成度について「まとめ」の授業を通して、学生は4年間で身に付けた資質能力と教職に就くにあたっての自己課題が明確になったと思いますかと尋ねた結果を示したものが表5-2である。88.9%の担当教員が「とてもそう思う」「そう思う」と回答しており、概ね良好な結果が得られた。

また、「まとめ」の授業の有意義だった点について、記述回答を求め、整理したものが表5-3である。それによれば、「4年間の学びを振り返り、学生自身の身に付けた資質能力と今後の取り組むべき自己課題が確認・把握できた点」や「学生の振り返りの内容や課題に対して現場の教師等からアドバイスやメッセージをもらうことで学生の励みになったり、不安を取り除くことができた点」が比較的多く回答されており、「まとめ」の授業の目的を反映するかたちで有意義な点が理解されていた。

さらに、「まとめ」の授業の課題について、記述回答を求め、整理したものが表5-4である。それによれば、「教職に向けた学びの記録」に関する課題として、その活用法と学生に記録させる際の根拠資料と記入内容の問題点が指摘されていた。その他、「事例研究や模擬授業との接続性」に関する課題や「まとめ」の授業の日程調整と授業時間に関する課題も挙げられていた。

表5-2 「まとめ」におけるめあての達成度

	とてもそう思う	そう思う	少しそう思う	そう思わない	合計
N	1	15	2	0	18
%	5.6	83.3	11.1	0.0	100.0

表5-3 「まとめ」の授業の有意義な点

「まとめ」の授業の有意義な点	N	%
4年間の学びを振り返り、学生自身の身に付けた資質能力と今後の取り組むべき自己課題が確認・把握できた点。	10	55.6
学生の振り返りの内容や課題に対して現場の教師等からアドバイスやメッセージをもらうことで学生の励みになったり、不安を取り除くことができた点	3	16.7
学生が4月から小学校現場に行くための心構えや自覚ができた点	2	11.1
表層の自己理解ではなく、自己洞察に近いレベルでの振り返りができ、自己を見直す機会になった点	2	11.1
学生から率直な意見を聞くことができ、今後の大学での授業改善にも繋げていける点	2	11.1

(注) 上記の回答は授業担当者(N=18)の回答に基づくものであり、複数回答の場合はそれぞれ独立した回答として処理した。

表5-4 「まとめ」の授業の課題

「まとめ」の授業の課題	N	%
「教職に向けた学びの記録」に関する課題 ・「教職に向けた学びの記録」の有意義な活用法を試行錯誤していく必要がある。 ・「教職に向けた学びの記録」のポートフォリオの量について個人差が大きいため、その原因を検討する必要がある。また、50項目すべてに記述させることが果たして効果的かどうかについて学生から意見が出た。	2	11.1
事例研究や模擬授業との接続性に関する課題 ・チューターとして事例研究と模擬授業を受ける学生の姿を観ておく必要性を感じた。 ・模擬授業をした教科特性を理解させないとまとめの成果に繋がりにくい。	2	11.1
「まとめ」の日程調整と授業時間に関する課題 ・「まとめ」の時間が十分に確保できず、日程調整がかなり難しい。 ・コースの学生は20名おり、個人面談形式では時間的に限りがある。	2	11.1

(注) 上記の回答は授業担当者(N=18)の回答に基づくものである。

5-2. 学生を対象とした質問紙調査

「まとめ」の授業終了後に176名の学生に対して質問紙調査を実施し、150名の学生からの回答を得た。まず初めに、「「まとめ」を通して、大学4年間で身に付けた資質能力と教職に就くにあたっての自己課題が明確になったと思いますか」という設問について4件法で回答してもらった結果が表5-5である。表5-5に示すように、81.3%の学生が「とてもそう思う」「そう思う」に回答しており、良好な結果が得られた。また、その結果を平成23年度の同様の設問に対する回答結果と検定を施したところ、両者の間に0.1%水準で有意差が認められた。このことから、平成23年度と比べて、平成24年度の「まとめ」の授業は、学生からの肯定的な評価が増え、より一層改善されたといえる。

さらに、「まとめ」の授業を通して具体的にどのような成果が得られたのかを記述回答で求め、その整理した結果を示したものが表5-6である。それによれば、「4年間を振り返ることによって、自分にどのような力が身につく、どのような力が足りないのかが自覚でき、これから自分が取り組むべき課題や目標が明確になった」という「まとめ」のめあてに沿った記述回答が最も多かった。つぎに、各学生が4年間の学びの成果と課題について発表したり、グループ討論をしたりしたこともあって、「友人の話聞くことで自分では気づかなかったことを知ることができ、多角的な視点で学びを深めることができた」という記述回答が多かった。その他に、「自分の目指す理想の教師像について考えることができた」や「教職に就くにあたっての自覚や意欲が高まった」、「教師にとって大切な資質や教師としての在り方を学んだ」という記述回答も多数得られた。また、件数は少ないが「まだまだ学び続けていくことが必要だと感じた」という記述があり、教員養成スタンダードの示す「学び続ける教師像」が反映された記述も存在した。さらに、「成長し続けるためには、他者とこのような機会を持つことが大切だと分かった」という記述もあり、「まとめ」の授業で用いた討論という方法論のよさを感じ取った学生もいた。

表5-5 「まとめ」の授業に対する学生の意識

		とてもそう思う	そう思う	少しそう思う	そう思わない	合計
平成24年度	N	33	89	28	0	150
	%	22.0	59.3	18.7	0.0	100.0
平成23年度	N	8	102	40	6	156
	%	5.1	65.4	25.6	3.8	100.0

$$\chi^2(3) = 24.1, p < .001$$

表5-6 「まとめ」を通して得られた具体的成果

成果についての記述内容	N	%
4年間を振り返ることによって、自分にどのような力が身につく、どのような力が足りないのかが自覚でき、これから自分が取り組むべき課題や目標が明確になった	77	51.3
友人の話聞くことで自分では気づかなかったことを知ることができ、多角的な視点で学びを深めることができた	27	18.0
自分の目指す理想の教師像について考えることができた	17	11.3
教職に就くにあたっての自覚や意欲が高まった	6	4.0
教師にとって大切な資質や教師としての在り方を学んだ	6	4.0
教師としての信念について考えることができた	5	3.3
まだまだ学び続けていくことが必要だと感じた	3	2.0
自分が今まで大切にしてきたことが改めて分かり、教師として子どもに伝えたいことが明確になった	3	2.0
授業づくりや子どもとの関わり、児童理解、学級経営、学校運営について学んだ	3	2.0
教師になったときに大学4年間の学び(授業内容等)を生かしていけると気づいた	3	2.0
さまざまな考えのある人たちとのチームワークが教師には必要だと実感した	2	1.3
成長し続けるためには、他者とこのような機会を持つことが大切だと分かった	2	1.3
自分が不安に思っていたこと、課題について先生から助言が得られ、不安が解消された	2	1.3
教職実践演習(事例研究と模擬授業)での学びを振り返り、それをどのように現場に生かすかを考えることができた	2	1.3
自分が教師を志した動機を再認識した	2	1.3
「自分の得意・不得意の把握、情報共有の大切さ、一人で背負い込まない」ことを学んだ	2	1.3
学生と社会人の違いについて知った	2	1.3
学校生活の流れや、そのときに教師がすべきことがイメージできるようになった	1	0.7
今まで現場で観てきた先生方とは違った考えや、技術を知ることができた	1	0.7

大学入学時と卒業前の今、自分の問題意識がどう変わったのかを知ることができた	1	0.7
何事にも知識が必要であることが分かった	1	0.7
これからはパソコンの能力を身に付ける必要があることが分かった	1	0.7
九九のカルタについて知り、これからの自分の教育に役立てていきたいと思った	1	0.7
教育の重要性と反省することの大切さを知った	1	0.7

(注) 上記の回答は有効回答者 (N=150) によるものであり、複数回答の場合はそれぞれ独立した回答として処理した。

さらに、「まとめ」の授業の内容や実施方法についての課題や改善点を記述回答で求め、それを整理した結果が表 5-7 である。それによれば、最も記述回答が多かった課題は、「実施時期」に関する課題であった。その具体的な内容は、第 14 回・第 15 回の授業日程のみが「模擬授業」や「事例研究」の日程から離れて実施されることや、各コースで「まとめ」の日程がバラバラに実施されることについての指摘である。次に多い課題は、「授業の実施方法」に関する課題であった。この主な内容は、討論の仕方についての改善点の指摘である。さらに、もう一つの多かった課題は、「履修カルテ」に関する課題であった。その具体的な内容は、学生が記入した履修カルテを「まとめ」の授業において活用しなかったこと、重複する内容や記入する項目数が多いことについての指摘である。学生が記入した履修カルテを授業で活用しなかったことは、学生の記入する意欲を減退させる要因になり得るので、次年度以降改善していく必要がある。

表 5-7 「まとめ」の授業の内容や実施方法についての課題や改善点

改善点についての記述内容	N	%
実施時期に関する課題 ・コースによって実施時期が異なるので統一してほしい ・できればもう少し早めにしてほしかった(試験期間と重なると厳しい) ・なぜ14・15回目だけ日程が違うのか分からない ・授業日がバラバラで流れが途切れやすい	10	6.7
授業の実施方法に関する課題 ・もう少し課題を早く出してほしかった ・実践的な内容で良かったが、実践的な問題を討論する場があればもっと良かった ・まとめも他コースを交えると、より広い視野をもって意見交流ができるのではないか ・全体討議よりもグループ討議の方が内容が深まったと思う ・グループの意見は聞けたが、全体についての発表を聞く機会があっても良いと思った	6	4.0
履修カルテに関する課題 ・書くだけでは反省できない ・学びの記録を授業内では使わなかった。せっかく書いたので活用してほしい ・学びの記録はアルバイト等について書いたもので、この授業との繋がりが分からない ・重複する内容等、もう少し項目を減らしてほしい。記入するのが大変だった ・学びの記録はいらない	6	4.0
授業の内容に関する課題 ・授業に自信のない学生がほとんどなので、そのスキルを上げるような内容にしてほしい	1	0.7
担当教員に関する課題 ・授業内容は良いが、担当教員を考えてほしい。実際の子どもを知らないのに理論だけ押しつけられている気がする	1	0.7

(注) 上記の回答は有効回答者 (N=150) によるものである。

全 15 回の教職実践演習を通して、教職実践演習のめあてがどの程度達成できているかについて 4 件法で回答を求め、その結果を示したものが表 5-8 である。「(1) 教職実践演習を通して、大学 4 年間で身に付けた資質能力が、教員養成スタンダードとして示された教師の資質能力として有機的に統合され、形成されていることを自覚することができた」については、46.6%の学生が「とてもあてはまる」「あてはまる」に回答したが、「少しあてはまる」に回答した学生の割合が多く、積極的に肯定する学生は多くなかった。それに対して、「(2) 教職実践演習を通して、将来教師になる上で、自分にとって何が課題であるか自覚できた」については、75.3%の学生が「とてもあてはまる」「あてはまる」に回答しており、積極的に肯定する学生が多かったといえる。また、「(3) 教職実践演習を通して、自分が不足している知識や技能を補うことができた」については、58.7%の学生が「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答しており、肯定的に回答する学生の方が多かった。これらの結果から、学生は、教

職実践演習を通して、大学4年間で身に付けた教師としての資質能力が有機的に統合され、形成されていることを自覚することよりも、将来教師になる上での自己の課題を自覚したり、自分の不足している知識や技能を補ったりすることができたと認識していることが読み取れた。

表 5-8 教職実践演習（全 15 回）を通しての学生の意識

	とてもあ てはまる	あてはま る	少しあて はまる	あてはま らない	M	SD
(1)教職実践演習を通して、大学4年間で身に付けた資質能力が、教員養成スタンダードとして示された教師の資質能力として有機的に統合され、形成されていることを自覚することができた	7.3	39.3	47.3	6.0	2.48	.72
(2)教職実践演習を通して、将来教師になる上で、自分にとって何が課題であるか自覚できた	25.3	50.0	24.0	0.7	3.00	.72
(3)教職実践演習を通して、自分が不足している知識や技能を補うことができた	14.7	44.0	39.3	2.0	2.71	.74

5-3. 「まとめ」の成果と今後の課題

「まとめ」の授業では、昨年度の反省を踏まえ、①「まとめ」が始まるまでに学生に「履修カルテ」を記入させ、「まとめ」で使用すること。②「まとめ」で取り扱う各コース共通の内容を「大学4年間で身に付けた資質能力や、教職に就くにあたっての自己課題をグループ討論等によって明確にする」こと、③「履修カルテ」の中の「自己課題」と「身についた資質能力」を学生に記入させることなどを改善点とし、実施した。

その結果、昨年度よりも今年度実施した「まとめ」の授業の方が、学生からの評価も良好であった。また、担当教員からの評価も肯定的であり、良好であった。したがって、昨年度の「まとめ」の授業に改善を加えたことによって、今年度の「まとめ」の授業については8割以上の学生と担当教員から高評価を得ることができた。

しかし、今後取り組むべき課題も残った。一つめは、「教職に向けての学びの記録」を記入しやすいものに改良することもさることながら、学生が記入した「教職に向けた学びの記録」を「まとめ」の授業で活用することであり、4年間での学びや経験から身に付けた資質能力や自己の学習課題などを発表し、討論するという授業内容を各コース共通のものとするものである。二つめは、「まとめ」の授業ではどのようにして「事例研究」「模擬授業」との連続性を持たせるのかという課題である。三つめは、「まとめ」の実施時期が学生にとっても教員にとっても実施しやすく、効果的な日程になるように設定することである。四つ目は、教職実践演習全体に関する課題であるが、「事例研究」「模擬授業」「まとめ」のいずれの授業も学生からの評価は良好であるけれども、全体として評価した際に、「今後の自己課題の発見・気づき」や、「自己の不足している知識や技能の補習」という意味合いの方が学生には強く認識されており、「教師として必要な資質能力の統合・形成の自覚」という成果の認識が弱いことである。教職実践演習という科目全体を通して学生の「教師として必要な資質能力の統合・形成の自覚」をどのように促していくかについて今後検討していく必要があると考えられる。

担当 別惣淳二

6. 結語

23年度の教職実践演習の結果をもとに24年度の授業に改善を加えたことによって、24年度の教職実践演習の評価は、「事例研究」「模擬授業」「まとめ」のいずれにおいても、前年度よりも良好で向上した。このことから、本学の「事例研究」「模擬授業」「まとめ」から構成される授業は「教職実践演習」として有効に機能すると考えられる。しかし、教職実践演習全体として評価した際に、学生には、自己課題の発見・気づきや、自己の不足している知識や技能の補完という意味合いの方が学生には強く認識されており、「教員として必要な資質能力の統合・形成の自覚」という成果の認識が弱いことも指摘される。教職実践演習という科目全体、またカリキュラムを通して学生の「教員として必要な資質能力の統合・形成の自覚」をどのように促していくかについて検討していくことが今後の課題である。